

07・彼女の気持ち

トラック06から一週間後。

とある年の春。

五月二十日。十七時ごろ。

場所は主人公の家が所有するビルの、応接室。

天気は晴れ。室温は二十四度程度。

主人公は今、ブランディングデザイナーの篠田 恭子と話している。

すでに打ち合わせは終わり、二人とも起立している状態。

二人の周囲には、勉強会にはいなかったメイドがいる。

● 正面 50センチ

〈恭子〉

「【退場まで、すべて主人公に話しかけている。

穏やかに、落ち着いて。

『ちよっとボーイッシュな印象の、格好いい、二十代後半のお姉さん』という感じで。

恭子は今回、主人公に初めて会った。

だが、主人公の事は、あまねからよく聞いている。

そのため以前から好感を抱いており、この度の仕事に関しても、とても楽しみにしていた。

そして実際に主人公と話し、イメージしていた以上の人物だという事がわかった。

なので、非常に好意的。主人公との仕事にとっても意欲があり、前向きである」

……では、そのように進めて行きましょう。

本日はお時間ありがとうございました。

とてもいいものになりそうで、今から楽しみです」

〈主人公〉

「こちらこそ、完成が大変楽しみです。

本日はわざわざお越しいただき、本当にありがとうございました！」

主人公、恭子とよい時間が過ごせたのが嬉しくて、深々と、大きく、何度もお礼をする。

少々興奮しすぎて、短い中に『ありがとう』が二回も入ってしまったが、まあ、これに関しては言いすぎて困る事はないだろう……。

と、思いながら、恭子に微笑みかける。

〈主人公〉

「篠田様は、本日電車で来られたのですよね？

お車をお出しします。

駅までお送りいたしますね」

● 正面 50センチ

〈恭子〉

「【少し驚いた様子で。

ありがたく思いつつも、穏やかに、やんわりと断ろうとする。

さすがにそこまでしてもらうのは申し訳ないので。

恭子は、ビルの外観やあまねの話からして、主人公が相当なお嬢様である事は理解していた。

だが、一方で『家の状況が芳しくない中、頑張っているらしい』『かなりの庶民派』であるとも聞いていた。

なので、そこまでしてもらうのは申し訳なく感じているので」

えっ？ いえいえ、とんでもない。

お車を出して頂くなんて……」

主人公の提案に、恭子は少々驚いた様子だ。

やんわりと断ろうとする。

だが、今日の主人公は気にしない。

そうする理由を話せば、きっと恭子も納得してくれるだろうと思っているからだ。

〈主人公〉

「実は、わたしもこれから外出するんです！

ですから、よろしければ一緒にいきませんか？」

● 正面 50センチ

〈恭子〉

「〔納得がいった様子で。〕

また『そのような理由であれば、お言葉に甘えてもいいような気がする』と判断したの
で」

……あ。なるほど……。

そうだったんですね。

〔にこやかにお礼を言う。〕

主人公の誘いに、ありがたく応じる事にしたので」
ありがとうございます。

では、お言葉に甘えて、ご一緒させて下さい」

〈主人公〉

「ぜひ！ では、行きましょうか」

主人公も移動する旨を告げると、恭子の表情はやわらぎ、同乗に応じてくれる。

主人公の予想通りだ。

だが、主人公の行き先は、決してウキウキ、ハキハキと述べられるようなものではない。

まあ、それは篠田さんには関係ない事だからいいとして……。

と思ひながら、主人公は早速恭子と歩き出す。

SE 1 主人公の足音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【少し響く加工をする】

【SE 2と一緒に流す】

【0 | 5秒ほど流してSE 3】

【SE 3が止まってから、3秒ほど経ってから『恭子』のセリフ】

【▲ 1 でSE 2と一緒に止まる】

SE 2 恭子の足音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し返して流す】

【少し響く加工をする】

【SE 1と一緒に流す】

【0 | 5秒ほど流してSE 3】

【SE 3が止まってから、3秒ほど経ってから『恭子』のセリフ】

【▲ 1 でSE 1と一緒に止まる】

SE 3 部屋の扉が開く音

【最初から最後まで流す】

● 正面 50センチ

〈恭子〉

「『ふと気になった』という感じで。

『差し支えなければ教えてほしい』という感じで。

どこに出かけるにしろ、主人公はまだ制服を着ているので」
ところで……。

あなたは、これからどちらへ？」

SE 4 部屋の扉が閉じる音

【最初から最後まで流す】

【背後で、少し小さめの音量で聞こえる】

すると、廊下に出たところでこんな質問をされた。

主人公は内心

……うつ。

と思いつつ、つとめて明るく、さら々と答える。

〈主人公〉

「学校です！」

● 正面 50センチ

〈恭子〉

「【少し驚いて。

まさか、そのような答えが返ってくるとは思っていなかったの】

えっ……？

学校へ？」

しかしこの回答は、恭子には驚きのものだったらしい。

むろん、驚かれてもしようがない気はするし、主人公自身、できればこうなる事は避けたかったのだが……。

〈主人公〉

「はい……実は補習がありました……」

● 正面 50センチ

〈恭子〉

「思わず笑顔になって。

爽やかに笑う。

主人公の答えが、あまりにも可愛らしいものだったので」

あはは……なるほど！」

主人公がもじもじと打ち明けると、恭子が口を開けて笑った。

それは、先ほどまでは見せなかったような、気を許した表情だ。

主人公としては『おおわたしよ、補習になってしまうとは情けない』としか言えない状況なのだが、恭子には好意的に受け止められたらしい。

……そう。主人公は先週の出来事を経てなお、また授業中に寝たり、テストで芳しくない点数をとったりしていたせいで、この度現国の補習を受ける事になってしまったのだ。

〈主人公〉

「あー！ 笑いましたね!!」

冗談交じりに怒って見せると、恭子がさらに楽しげにする。

なんとか笑いをこらえながら、釈明までしてくれる。

● 正面 50センチ

〈恭子〉

「【思わず笑ってしまいながらも、爽やかに謝る。

また、今日主人公に会うまでの心境を、正直に述べていく】
ふふっ……。申し訳ありません。

あなたのような優秀な方から『補習』という言葉聞いて、つい、安心してしまったんです。

実を言うと今日は、とても緊張していたものですから」

〈主人公〉

「えっ……？

篠田様がわたしに緊張するなんて、あるんですか？」

だが、今度は主人公が驚かされる番のようだ。

きょんと尋ねると、恭子は少し照れたように頷く。

主人公は恭子の事を『ものすごく多数かつ、ものすごく有名なクライアントたちと仕事

している、主人公との仕事なんて別段何とも思ってもいない位、すごい人』と思い込んでいたが……。

どうやら、そうではなかったらしい。

● 正面 50センチ

〈恭子〉

「『穏やかに、落ち着いて。』

今日主人公に会うまでの想いを、正直に述べていく』

ええ。緊張しますよ。

あなたの事は、かねてから存じ上げていましたから。

確かに、あまねから話を聞く事はありましたが……。

「ちよつと苦笑して。」

『あなたもご存知だとは思いますが……』という感じで。

あまねの抽象的だったり、前向きすぎたりする考え方、伝え方について言っている』

ほら、あの子の表現は、ちよつと独特でしょう？」

〈主人公〉

「あはは……確かに」

……言われてみると、確かにわからないでもない。
というか、非常にわかる。

主人公の頭の中に、何やらよくわからない抽象的な表現で話すあまねと、大量の『？』マークを浮かべながらそれを聞き、よくわからないまま相槌を打っている恭子の姿が浮かぶ。

その中で主人公は、ずいぶんとふわふわした説明をされているだろう。
この空想があながち間違っていないものだとなると、恭子の緊張は、途端に自然なものに思えてきた。

● 正面 50センチ

〈恭子〉

「【穏やかに、落ち着いて。
だがどこか嬉しそうに。

今日主人公と会い、主人公であれば、とてもよい仕事ができそうだという予感がある
ので」

だから、どのような方なのだろうかと、実はドキドキしていたんです。

今日お人柄を知れて、とてもホッと思いました」

▲ 1 ここでS E 1と2がストップする。

二人、ここでエレベーターの前に到着する。

恭子、このタイミングで主人公の方を改めて向き、優しく微笑みかける。

● 正面 50センチ

〈恭子〉

「穏やかに、落ち着いて。

だがどこか嬉しそうに。

今日主人公と会い、主人公であれば、とてもよい仕事ができそうだという予感がある
ので」

あなたとお仕事できる事を光栄に思います。

これからご期待に合い、お役に立てるよう、尽力致しますね」

〈主人公〉

「……………」

SE 5 エレベーターのチャイムが鳴る音

【最初から最後まで流す】

【小さな音量で流す】

その時、エレベーターのチャイムが鳴る。

同時に、恭子の白い手が、主人公に差し伸べられ……握手を求めてくれた。

● 正面 50センチ

〈恭子〉

「【爽やかに礼儀正しく。

『改めて、どうぞよろしくお願いします』という感じで

これからどうぞ……よろしくお願いします」

一度フェードアウトする。

SE 6 夕暮れの教室の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【0―5秒ほど流してSE7】

【外の音が、窓を閉めた室内で聞こえる】

【フェードアウトするまで流し続ける】

約一時間後。

五月二十日。十八時ごろ。

場所は主人公とシィラが通っている学園の、3年A組。

主人公、教室で一人、補習用の問題を解いている。

先ほどまでは、補習監督として梓がいた。

だが、顧問を務める陸上部で何かあったようだ。

先ほどジャージ姿の生徒に呼ばれて、席を外してしまったのである。

なので主人公は、一人、黙々と問題を解いている。

しかし、その表情はにやにやとゆるみ、幸せそのものだ。

恭子との時間が、とても良いものに終わったからだ。

主人公、

——えっへっへ。

あの、あの篠田さんに、どうぞよろしくされちゃったあ。

これを聞いたら、シーラ達、きつと喜ぶぞお……。

補習終わったら、すぐ連絡しなくちゃね。

ていうか、本当は移動しながら報告しようと思ったんだけど、スマホ出してる間もなくできなかった……。

まあ、シーラも勉強会だろうから、いいか。

かえってお邪魔になったかもしれないしね……。

と、次第にゆるんだ表情を暗くさせながら思っている……。

SE 7 主人公がプリントに文字を書く音

【最初から最後まで流す】

SE 8 教室の扉が開く音

【最初から最後まで流す】

【ほんの最初だけ、SE 7と重ねて流す】

すでに少し開いていた教室の扉が大きく開き、あまねと日菜子がやってきた。

▲ ボイス加工あり

「5メートルほど離れた位置から聞こえる」

● 正面 30センチ

〈あまね〉

「主人公に話しかけている。

明るく嬉しそうに。

予想通り、主人公がここにいた事が嬉しいので」

あゝ！ いたいたあゝ！」

▲ ボイス加工あり

「5メートルほど離れた位置から聞こえる」

● 正面 30センチ

〈日菜子〉

「主人公に話しかけている。

穏やかに優しく。

補習にいそしむ主人公をねぎらう」
お疲れ様」

SE9 日菜子が差し入れを見せる音
【最初から最後まで流す】

▲ ボイス加工あり

【5メートルほど離れた位置から聞こえる】

● 正面 30センチ

〈日菜子〉

「主人公に話しかけている。
穏やかに優しく。

補習にいそしむ主人公をねぎらう。

差し入れのお菓子と飲み物を見せながら言っているイメージで」
差し入れ持ってきたよ」

〈主人公〉

「あまね、日菜子……！」

主人公、意外な人物たちの登場に嬉しくなり、思わず立ち上がりそうになる。だが、ひとまずそれはやめて……代わりにぶんぶんと手を振るのにとどめる。するとあまねと日菜子は、そのまま主人公の席まで近づいてきてくれた。

SE10 あまねの足音

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくる】

【SE11と一緒に流す】

【0―5秒ほど流して『あまね』のセリフ】

【セリフと重ねて流す】

【▲2でSE11と一緒に止まる】

SE11 日菜子の足音

【最初から途中まで流す】

【だんだん近づいてくる】

【SE10と一緒に流す】

【0―5秒ほど流して『あまね』のセリフ】

「セリフと重ねて流す」

〔▲2 でSE11と一緒に止まる〕

SE12 教室の扉が閉じる音

〔最初から最後まで流す〕

〔SE10と11に重なるように、やや遠くで小さく聞こえる〕

▲ ボイス加工あり

〔5メートルほど離れた位置から、だんだん近づいてくる〕

〔50センチ地点くらいでストップする〕

● 正面 50センチ

〈あまね〉

「主人公に話しかけている。

明るく嬉しそうに。

あまねは今日、主人公と恭子の打ち合わせがあつた事を知っている。

なので、打ち合わせ後、すぐに補習に来たのだろう主人公をねぎらう」

篠田さんとの打ち合わせ、お疲れ様あゝ！

終わってすぐ補習とか、ほんと大変だねえ」

〈主人公〉

「ありがと！」

補習はまあ、しやあないよ。
点数やばかったからね」

● 正面 50センチ

〈日菜子〉

「【穏やかに微笑む】

ふふふ。

【主人公に話しかけている。

だんだん近づいてきて、主人公の解いている問題が目に入ってから発言するイメージで】
でも、課題は順調みたいだね。

【少し不思議そうに。

主人公が教室に一人であり、補習を担当するはずの梓がいない事が、教室に入る前から
気になっていたのだ。

『御影先生』とは梓の事】

御影（みかげ）先生は、どこか行っちゃったの？」

SE13 あまねと日菜子が椅子に座る音

【最初から最後まで流す】

あまねと日菜子、主人公のすぐ近くの椅子に着席する。

〈主人公〉

「そうそう。」

何か陸部の子に呼ばれてそっち行っちゃった。
なかなか戻ってこないのよ」

主人公が答えると、日菜子は『なるほど』と小さく頷く。
だがあまねは、何だか残念そうだ。

彼女には、他にも予想外の事があったらしい。

● 正面 50センチ

〈あまね〉

「【主人公に話しかけている。】

きよとんと不思議そうに。

梓だけではなく、シーラもない事に気づいたので」

そうなんだあ。

しいちゃんもいないね〜？」

〈主人公〉

「あ……」

主人公、その言葉の意味するところを理解して、先ほどの日菜子の真似をするように小さく頷く。

あまねにとって、主人公とシーラはいつも一緒にいるもの。

たとえシーラが補習を受けなくとも、ボディガードとして帯同しているもの。そう思ったのにここにいないから、驚いているのだろう。

● 正面 50センチ

〈日菜子〉

「あまねに話しかけている。

苦笑しつつ、あまねをたしなめる」

あまね。シーラちゃんは今日、勉強会でしょ」

● 正面 50センチ

〈あまね〉

「主人公と日菜子に話しかけている。

『確かにそうだったあ!』という感じで。

あまねにとって、主人公とシーラは、常に一緒にいるもの。

たとえ主人公のみが補習であろうと、シーラも同行するものだと思っていたので。

また、過去に、実際にそのような事があったので」

あゝ! そっかあ!」

〈主人公〉

「そゝそゝ。

シーラは今日、志保達と勉強会だよ。

また学校まで来てもらうのも悪いし、終わった後は直帰してもらう事にしてるゝ」

主人公、すっかりあまねの口調が移ってしまいがら、最後の問題の答えを書き、解答の見直しを始める。

梓の帰還を待つうち、主人公は最終問題まで解き終えてしまった。
後はもうこれを提出すれば帰れるのだが、梓はまだ戻ってくる気配がない。

● 正面 50センチ

〈あまね〉

「主人公と日菜子に話しかけている。
ちよつと残念そうに、また、納得が行かない様子で。」

「シーラは時間の許す限り、主人公のそばに居るものだと思っているので」
「何（なん）か最近、別行動多めだよね。
しいちゃん、すつごく忙しそう」

● 正面 50センチ

〈日菜子〉

「主人公とあまねに話しかけている。
穏やかに、だが少し残念そうに。」

※説明セリフなので、ややゆっくりめ※ に。

「シーラの現状について、自身の知っている範囲で述べていく」
「シーラちゃん。勉強会への参加表明がきっかけで、すごくやる気だと思われるちゃって。」

志保さんに色々薦められてるんだっけ」

〈主人公〉

「そうなのよお。

おかげですごく忙しくなっちゃったけど、何か楽しそうにやってるよ。

シーラも『見聞を広められて嬉しい』って言ってたし。

わたしも負けずに頑張らなくっちゃね」

主人公、見直しを終えるとともに、二人を笑顔で見上げる。

主人公としては、少々淋しくはある。

いや、正直な所、かなり淋しくはあるが、それでも前向きに、明るい展望をもって答え
たつもりだ。

……しかし、あまねは暗い表情のままだ。

シーラに会えなくて、そんなにも残念なのだろうか。

主人公がそう思っていると、あまねは主人公を見てこう尋ねた。

● 正面 50センチ

〈あまね〉

「主人公と日菜子に話しかけている。

わかりやすく残念そうに。

あまねはシーラに会いたかったのだ。

また『主人公もさぞ淋しいだろうなあ、残念だろうなあ』と思っているので
はあ。淋しいねえ……。

【主人公に話しかけている。

同意を求める感じで】

淋しいよねえ？」

〈主人公〉

「……えっ？」

主人公、ストレートに問われた事で、急に自信がなくなっていく。

主人公は今の状況を、とてもいいものだと思っている。

というか、いいものだと思おうとしている。

なのにあまねは、とてもそうではなさそうだ。

おまけに日菜子も、気遣うような目で主人公を見つめている。

これは一体、どういう事なのだろう？

——ていうかこの調子だと、日菜子もあまね側っぽい……？
でも、どうして？

いつもベタベタしてるより、お互い別々の世界や、自分ひとりの時間も持ってる方が、
格好いいカップルって感じが、しない？

と、主人公が、誰に同意を求めるでもなく考え、

〈主人公〉

「……そりゃあ、淋しいとは思ってるけど。

これも、必要な事だし？

いつもくっついて行動してるだけじゃ、いけないと思うしっ？
前向きに捉えてますよお……？」

などと、どこか言い訳じみた返答をしても……。

● 正面 50センチ
〈あまね〉

「主人公に話しかけている。

『あまりよくわからない』という感じで。

あまねは、主人公の主張自体は理解しており、間違っていないと思っている。

だが、その割には、シーラがそこまで楽しそうには見えないし、主人公は淋しそうな
で」

へえ………？」

〈主人公〉

「だ、だってほら！

わたしはシーラと、お嬢様とメイドの関係じゃなくて。

もっと！ 対等な関係を目指していますからね！

いつもただ一緒にいるんじゃないって。

お互いの成長のためには、別々に過ごす事も覚えたって訳！

将来的には、絶対その方がうまく行くでしょ？」

● 正面 50センチ

〈あまね〉

「主人公に話しかけている。

しよぼんとした様子で。

主人公の言葉を復唱している」

対等、かあ」

二人はなぜかこの調子だ。

顔を見合わせ、揃って浮かない表情でいる。

●正面 50センチ

〈日菜子〉

「少し独り言っぽく。

穏やかに優しく、だが、納得はしてない様子で。

主人公の言葉を復唱している」

対等かあ……」

〈主人公〉

「そう！ そうそう！ 対等！ 対等です！」

だからいよいよ強く言い切ると、あまねの口が、露骨にへの字になった。

主人公なりに噛み砕いて説明したつもりなのだが、まだ納得してくれていないらしい。

●正面 50センチ

〈あまね〉

「主人公に話しかけている。

『あまりよくわからないので、確認したい』という感じで」
つまりい。

二人は今、

「『より対等』を自信なさげに。

『この解釈でいいの?』という感じで。

あまね自身、この解釈でいいか自信がないし、たとえ正解でも『あまりよくわからない
考え方だなあ』と思っているので」

『より対等』

な関係になる為に。

ばらばらに頑張ってるって事々?

「少し間をあけてから。

きよとんと不思議そうに。

純粹に疑問に思っている感じで。

※批判的、否定的な感じにならないようにお願いします※
だから、淋しくても我慢してるの？」

〈主人公〉

「……そうです！　少なくとも、わたしはね！」

ゆえに、主人公もだんだん引き返せなくなってくる。

だが、せめて無駄に胸を張りながら答えてはみるものの、すでに主人公は、

……シーラは、どう思ってるか知らないけど……。

もしかすると『ボディガードより外で勉強するほうがずっと楽しいじゃん！　もっとこっち方面の仕事入りたい！　今後お嬢様の世話は、他のメイドに任せとこ！』とかって、思ってるかもしれないけど……。

などと考え始めており、すっかり自信をなくしている。

主人公はこの『別行動多め』な現状を、一時的なもの。

あるいは、今後継続的にはあるが、そう多くの割合を占めないものとして捉えている。

だから、我慢する事ができている。

……だが、シーラはそうは思っていないかもしれない。

もしかすると、今回の経験を基に、今後別々の時間の割合を、どんどん増やしていくつもりかもしれない。

そう思ったら……だんだん淋しさの方が多くなって、不安が強まって来てしまったのだ。

●正面 50センチ

〈あまね〉

「主人公に話しかけている。

納得しきれていない感じで。

『やっぱりあまりよくわからない』と思っているのだ」

ふふ……ん？

【自分の素直な気持ちを述べる。

『主人公と自分の考えが違うのは仕方ない。だが、これは伝えておくべきだ』と
思っているのだ。

※批判的、否定的な感じにならないようにお願いします※
でもおろ。

しいちゃん絶対淋しがってるよねえ？」

〈主人公〉

「え？」

だから、あまねの発言は予想外だった。

もし淋しく思ったり、不安を感じたりするのであれば、それは主人公だけ。少なくとも、主人公はそう考えていたからだ。

● 正面 50センチ

〈日菜子〉

「※息づかいのみ※ で表現する。

小さく息をのむ。

穏やかな反応だが『え？』という主人公の回答に、内心少し呆れている。

なので、主人公に対して『え？』という事はないだろう……まさか気づいていないのかな……』と思っている。

だが、今はまだ主人公とあまねの会話を見守っていようと思っているので黙っている」

「……………」

〈主人公〉

「いやいや。そんなまさか、シーラだよお？」

あのシーラ。

『年齢プラス10か？ 20か？』ってくらい達観してるシーラが、ちよつとわたしと離れるくらいで、淋しいなんて思う訳ないじゃん」

●正面 50センチ

〈あまね〉

「【少し驚いて。

まさか、そんな答えが返ってくるとは思っていなかったの。

※批判的、否定的な感じにならないようにお願いします※】

ええ？

今、そんなまさかって言っただけ？」

〈主人公〉

「そう、だけど……」

●正面 50センチ

〈日菜子〉

「※息づかいのみ※ で表現する。

日菜子としても言いたい事はある。

だが、今はまだ主人公とあまねの会話を見守っていようと思っているので」

……………」

● 正面 50センチ

〈あまね〉

「【少し困った様子で。

言葉を選ぶとするがゆえに、言いよどんでいる感じで。

主人公が想像以上に、シーラの感情に鈍い事がわかったので】

……………えーつとお……………」

しかし、今日はとことん、二人と意見が合わないようだ。

主人公が己の意見を述べれば述べる程、あまねは困惑し、日菜子は静かになる。

それでも主人公は一体何がおかしいのかわからず、とうとう言葉を失ってしまった。

すると、そこで助け舟を出すように、日菜子が話し出す。

●正面 50センチ

〈日菜子〉

「【※息づかいのみ※】で表現する。

一度、小さく息を吸ってから話し始めるイメージで」

……。

【少し間をあけてから。

穏やかに優しく。

だが、大切な話を切り出す感じで。

先週から感じていた疑問について、主人公と話し合う時が来たと感じたので】

そうだな……。

あのね。

急にごめんね。

ちよつと、違う話してもいい？」

〈主人公〉

「へ？」

もしかすると、話題を変える事で、この場の雰囲気を変えようとしているのだろうか。

日菜子の提案に主人公は虚を突かれるが、まずは素直に頷く。

日菜子は無意味な提案をする女性ではない。

であれば、まずは従おうと思ったのだ。

● 正面 50センチ

〈あまね〉

「少し不思議そうに。

日菜子の意図は、何となくだが理解している。

『日菜子は今から、全く無関係の話を始める訳ではないだろう。何か関連のある話をするつもりなのだろう』という事まではわかつている。

だが、それが具体的になんなのかまでは、よくわからないので」

うん……？」

● 正面 50センチ

〈日菜子〉

「穏やかに優しく。

ここから、主人公をそつと諭すように話し始める」

この前の。現国の授業の事」

〈主人公〉

「……うん」

しかし切り出された話題は、シーラと関連しているのか、していないのか、どうにも判断しかねるものだ。

確かに主人公は、今の現国の教材である小説に、並々ならぬ関心と共感を寄せている。だが、彼らはあくまで架空の人物だ。

内容について語り合うにしろ、これまで日菜子がこの作品に別段興味を持っているようには見えなかった。

だから、このチョイスは少々不思議に思える。

主人公は要領を得ないままひとまず領き、それはあまねも同様のように見える。

● 正面 50センチ

〈日菜子〉

「【穏やかに優しく。】

※これまでの内容を振り返るセリフ※」なので、ややゆっくりめに。

まずは、トラック01で主人公が語った、作品の解釈について述べる」

あの時あなたは、

『小説の『主人公』は、ヒロインである『彼女』と対等になりたいと思っている』

『そうするには、まず、彼女を様々ながらみから解放し、選択の余地がある状態にしないではいけない』

『そうする事で、彼女は救われ、一人の人間として独立する事ができるからだ』

【少し間をあけてから。

一行前を踏まえて『その時二人は、真に対等になれる』ので』

『その時二人は、真に対等になれる』

【少し間をあけてから。

確認するような感じで。

『そう考えているから、今は無茶をしている』のは、小説の主人公も、いま語りかけている主人公も同じなので』

『そう主人公は考えているから、今は無茶をしている』
って、言ったよね。

【穏やかに優しく。

今度は、主人公の解釈に対して、自分の意見を述べる』

……でも、その意見。

私はちよっと、あなたの主観が多く入ってるなって思ったの。

あなたの考える主人公は、ちょっと、対等になる事を重視しすぎてるなって。もちろん、色々な解釈があつていいと思う。

ただ、私のとは、ちよつと違う。そう思ったの」

〈主人公〉

「え……？」

そこへ来たこの指摘は、意外そのものだ。

だが日菜子は、唐突にこんな話をしている訳ではないだろう。

それに、『小説の主人公』と『ヒロインである彼女』を、それぞれ何と関連付けて話そうとしているのかは……鈍い主人公でも、わかつてきた気がする。

●正面 50センチ

〈あまね〉

「『なるほど』という感じで。

あくまで中立の立場で続きを促す。

あまねは、日菜子の意図をまだ、完全にはわかっていない。

だが、このまま日菜子が話しやすい環境を作ろうと思っている」

へえー……ひなちゃん、そんな事考えてたんだー？」

● 正面 50センチ

〈日菜子〉

「『穏やかに優しく。』

※重要なセリフ※ なので、ややゆっくりめに。

今度は、自分なりの解釈を述べている。

だが、それは結果的に、シーラの心情を述べたものになる。

『小説の主人公Ⅱ主人公』『彼女Ⅱシーラ』として話している」
うん。

だから……今日は、私の解釈を言うね。

私思うに。

「あえて『気持ちはあると思う』という『とても積極的というわけではない』表現にとどめて話す」

『主人公』が望むように、『彼女』もまた、主人公と対等になりたい気持ちはあると思う。
【自然なようで、あえてこの表現をしている。

あまねと日菜子は、シーラから『主人公にふさわしいメイドになりたいので、勉強会など、色々チャレンジしてみる事にした』と聞いているので】

……それは、主人公にふさわしい人物になりたいから」

〈主人公〉

「ふさわ……しい……」

“ええ。私も。”

少しでもお嬢様にふさわしい存在になりとうございますから”

主人公の脳裏に、一週間前のシーラの発言が蘇る。

そうだ。あの時シーラは、主人公にふさわしい存在になりたいから、勉強会に行ってみると言った。

この一週間で過ごして、彼女の心境がどう変化したかはわからない。

だが、少なくとも一週間前までは……主人公のために、別々に過ごす事を承諾していたのだ。

● 正面 50センチ

〈日菜子〉

「【穏やかに優しく。】

※重要なセリフ※ なので、ややゆっくりめに。

今度は、自分なりの解釈を述べている。

だが、それは結果的に、シーラの心情を述べたものになる。

『小説の主人公Ⅱ主人公』『彼女Ⅱシーラ』として話している。

また、シーラの様子から推測した事を話している」

彼女は、自分に選択肢を与える為に頑張っている主人公に恩を感じているし……。その姿を尊敬している。

だから、たとえ、一緒にいられない事で淋しい思いをしても。

きっと何も言わないと思う」

● 正面 50センチ

〈あまね〉

「【※息づかいのみ※】で表現する。

納得して息をのむ。

『なるほど、日菜子はそういう事を伝えたかったのか』という感じで」

……！」

……だからもし、主人公が今考えるように。

日菜子が『小説の『主人公』と『彼女』』と『主人公とシーラ』の関係を、なぞらえて話してくれているなら。

日菜子、いや、日菜子とあまねは、既に見てきたのではないだろうか。

『たとえば、一緒にいられない事で淋しい思いをしても。きっと何も言わない』シーラの事を。

●正面 50センチ

〈日菜子〉

「【穏やかに優しく。

※重要なセリフ※ なので、ややゆっくりめに。

今度は、自分なりの解釈を述べている。

これは同時に、主人公への問いかけ、そして要望を述べたものでもある」だから。この課題にはないし。

小説でも描かれる事はなかったけど……。

もし、この解釈が『意外と近いかも』『正解かも』って思った時。

『主人公』は、どうするんだろう。って思う事があるの。

【穏やかに優しく。

主人公を優しく論ずる感じで」

……あなたは、どう思う？

主人公は、どうするのかな？」

〈主人公〉

「……………」

日菜子が、主人公を正面から見つめて問う。

SE14 あまねのスマホの通知音

【最初から最後まで流す】

だが、主人公が息をのみ、返事をしようとした瞬間、ふいにスマホの通知音が鳴った。

〈主人公〉

「……………！」

●正面 50センチ

〈あまね〉

「スマホを見てひとりごとを言っている。

きやつきやと嬉しそうに。

あまねは主人公と日菜子が話している間に、これからどうするべきかを察し、シーラに『今どこにいるの?』と連絡していた。

その返事が来た上、アクセスしやすいところにシーラがいるとわかったので」

あゝ♡」

……どうやら、あまねのものようだ。

だがあまねは、会話が止まった事を気にも留めぬ様子でスマホの画面を確認すると、そのまま数回の操作を行う。

それからくるっと主人公と日菜子を見て……嬉しそうにこう言った。

● 正面 50センチ

〈あまね〉

「主人公と日菜子に話しかけている。

きやつきやと嬉しそうに。

あまねは主人公と日菜子が話している間に、これからどうするべきかを察し、シーラに

『今どこにいるの?』と連絡していた。

その返事が来た上、アクセスしやすいところにシーラがいるとわかったので
返事きたあ♥」

● 正面 50センチ

〈日菜子〉

「あまねに話しかけている。

穏やかに優しく。

答えを半ばわかっていて、あえて尋ねる感じで」
ん? 誰から?」

● 正面 50センチ

〈あまね〉

「主人公と日菜子に話しかけている。

きやつきやと嬉しそうに。

早速、シーラが今どうしているのかを二人に告げる」
しいちゃん♥」

〈主人公〉

「……！」

● 正面 50センチ

〈あまね〉

「主人公と日菜子に話しかけている。

きやつきやと嬉しそうに。

早速、シーラが今どうしているのかを二人に告げる」

今どうしてるのか、気になったから聞いたの♡

『勉強会終わって、お庭の手入れしてまゝす』だって♡」

ここで、主人公と日菜子の二人に話しかけていたはずのあまねが、まっすぐに主人公に身体を向ける。

それはあまりにもストレートな表現だ。

だから鈍感な主人公でも、なぜ、あまねがシーラに連絡してくれたのか、もうわかってしまった。

● 正面 50センチ

〈あまね〉

「主人公に話しかけている。
にっこりと。」

『とっても暇で、時間ある』を強調して言う。

実際はシーラはそうとまでは言っていないが、絶対にそうだと確信して言う。
暗に主人公に『今すぐ会っておいでよ!』と促したので」

今とっても暇で、時間あるって♥」

SE15 主人公が机から立ち上がる音

「最初から最後まで流す」

ゆえに主人公は、衝動的に立ち上がる。

梓が戻る気配はない。

だから主人公は、本来まだここを出てはいけけない。

でも、今すぐにしたい事があった。

会いたい人に会う事だ。

〈主人公〉

「……行っても、いいのかな」

● 正面 50センチ

〈日菜子〉

「『穏やかに優しく。』

主人公の発言の意図を理解しつつ、あえて確認する。

主人公の意思をはっきりさせておきたいので」

ん？ どこへ行くの？」

そんな主人公に、日菜子があえて問う。

普段はとても温厚な日菜子だが、今回は相当心配させ、また、呆れさせてしまったようだ。

一方的な暴走で友人を困らせた主人公に、明確な意思表示を求めてくる。

〈主人公〉

「『あの小説の主人公』だったら、行くだろう、って、ところ」

● 正面 50センチ

〈日菜子〉

「主人公に話しかけている。

穏やかに優しく。

あくまで『どこへ行くのかはわからないが……』という体で話しつつ、肯定する」
そうなんだ。

【少し間をあけてから。

机の上に置かれた課題の完成度合いを、一度見ってから話し始めるイメージで】

まあ、課題はできてみたいだし……。

どうしても外せない用事があるなら、仕方ないと思う。

御影先生には、私達が代わりに渡しておいてあげる」

● 正面 50センチ

〈あまね〉

「主人公に話しかけている。

きやつきやと嬉しそうに。

『ぜひそうするといい』という感じで】

そうだね♡

『すごい大事な急用ができたみたい♡』って、先生にはうまく言っとく♡」

日菜子が微笑み、あまねが背中を押してくれる。

だから主人公はかばんを手に取ると、すぐさま教室の外へと駆け出した。

SE16 主人公が荷物を持ち上げる音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「ありがとう……日菜子、あまね！

……行ってくる！」

● 正面 50センチ

〈日菜子〉

「主人公に話しかけている。

穏やかに優しく」

気をつけてね」

● 正面 50センチ

〈あまね〉

「主人公に話しかけている。
きやつきやと嬉しそうに。

『応援してるよく♥』という感じで
いってらっしゃい♥」

SE 17 主人公が歩き出す音

「最初から最後まで流す」

「だんだん早くなる」

「だんだんフェードアウトする」

一度フェードアウトする。

数十分後。

五月二十日。十八時すぎ。

場所は主人公の自宅、庭園。

主人公、庭を、シーラを探して歩いている。

SE18 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【0—5秒ほどまで流してSE19】

【その後、ごく小さな音量で流す】

【トラック終了まで流し続ける】

SE19 主人公の足音

【最初から最後まで流す】

すると、向こうから誰かが近づいてくる。

さすがはシーラだ。

足音から主人公が近くにいると察して、迎えに来てくれたのだろう。

SE20 シーラの足音

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくる】

【とても遠い位置から、2メートル地点くらい離れた所で止まる】

▲ ボイス加工あり

〔2メートルほど離れた位置から聞こえる〕

● 正面 30センチ

「〔少し驚いた様子で。

主人公の存在に気づいたので、急いで歩いてきた。

だが、なぜ、主人公がここにいるのかはわからない。

『まだ補習を受けているはずではないのか』と思っている

お嬢様……?」

〈主人公〉

「……やあ、シーラあ……」

主人公、シーラの姿を認めると、切れた息も隠さず、不自然に軽く手を挙げ、少々苦しげに挨拶する。

▲ ボイス加工あり

〔2メートルほど離れた位置から聞こえる〕

「だんだん近づいてきて、正面30センチの距離で止まる」

●正面 30センチ

「少し驚いた様子で。」

なぜ、主人公がここにいるのかわからないので」

なぜ、こちらへ……。

補習は、いかがなされたのですか？」

〈主人公〉

「んー？

……えーつと……。えーつとねえ……。」

……かと思えば、照れてあからさまに目をそらしてみたり、前髪を触って今更整えるふりをしたりと落ち着かない。

ご存知の通り、主人公はシーラを探して、学校から一目散にここへ来た。

なのに、いざ彼女を見つけると、急に恥ずかしくなってしまったのだ。

それは、久しぶりにゆっくり一緒にいられるかもしれないのが嬉しくて。

同時に、とても不安でもあるからだ。

だから、

……つい盛り上がって、ここまで走ってきたはいいけど。
会いたいと思ってたのは、わたしだけだったらどうしよう……。

そう思ってしまうと急に上手く言葉が出なくなって、困ってしまったのだ。
なので主人公は、いささか奇妙な挙動をしながら近づいて行く。
対するシーラは、普段とまるで変わらない様子で、こちらへ歩いて来てくれる。

▲ ボイス加工あり

【2メートルほど離れた位置から聞こえる】

【だんだん近づいてきて、正面30センチの距離で止まる】

● 正面 30センチ

【優しく穏やかに。

主人公の言葉を復唱して、続きを促している】
えっと？」

〈主人公〉

「補習……爆速で、終わったから。

……シーラに会いたくて！

早く帰ってきちゃったよ……♡」

主人公、勇気を出して素直な思いを打ち明けてみたつもりが、今度はなんだか冗談っぽく聞こえてしまう。

……なんでこう、わたしはいつもこうなのか。

シーラとは『一体何年付き合ってるんだ』って関係のはずなのに。
なんでこう、いまだに毎回こうなのか。

そう思いながらも、すぐそばまで向かっていく。

●正面 30センチ

「少し安心した様子で。

少なくとも、補習はちゃんと終えてきたらしい事がわかったので」
然様（さよう）で、ございましたか……。

【穏やかに優しく。

思わず抱きしめなくなる衝動をこらえて、普段通り、主人公をねぎらう。
この一週間ほど非常に忙しく、あまり主人公と過ごせなかった事。

それを淋しく思う気持ちは隠している」
お帰りなさいませ。

本日も、大変お疲れ様でございました」

〈主人公〉

「シーラは！

シーラは勉強会、どうだった？

志保たちにも後で聞くけど、シーラ的にはどうだった？」

こうして二人の、ちょっと不自然な会話が始まる。

いや、様子がおかしいのは主人公だけで、シーラはいつも通りなのだろう。

そう思い主人公は悔しくなるが、すぐに『いいや、本当にそうだろうか？』と気づく。

……果たして『本当にそう』で『シーラはいつも通り』なら。

あまねと日菜子は、先ほどのような事を言っただろうか？

『本当はそうじゃない』

『シーラはずっといつも通り風になっているけど、本当はいつも通りじゃない』

そう判断したから、主人公はここまで来たのではないか？

● 正面 30センチ

「穏やかに優しく。」

主人公の質問に答え、また感謝の気持ちを述べる。

この一週間ほど非常に忙しく、あまり主人公と過ごせなかった事。それを淋しく思う気持ちは隠している」

……はい。

私（わたくし）の方は滞りなく。

大変充実した時間を過ごして参りました。どこでも、とてもよい経験をさせて頂き。

大きな糧になったと感じております。

【特に丁寧に。

『改めまして、ありがとうございます』という感じで」
お嬢様、ありがとうございました」

〈主人公〉

「そっ、か」

目の前のシーラはいつも通り穏微笑んでおり、その姿は、いつもと何も変わらないように見える。

あまりに普段通りだから、一度は決めたはずの主人公の決断も揺れる。

● 正面 30センチ

「『穏やかに優しく。』

主人公を気遣う。

自分の事ではなく、主人公の事に話題を切り替えようとする。

このまま自分の事を話していると、淋しかった事を吐露してしまいそうなので」
それよりも。

お嬢様は、いかがでございました？

篠田様と打ち合わせされ、補習にも行かれて、さぞお疲れでしょう。

中へ入って、何か温かいものでも……」

〈主人公〉

「……あのね、シーラ」

● 正面 30センチ

「少し不思議そうに。

主人公が何を言おうとしているのか、見当もつかないので。

また、主人公が何やら神妙な様子でいるのが気になるので」

……え？」

だけど主人公は、もう一度勇気を出してみる。

自分よりもずっと背の高いシーラに、少々背伸びして、正面から見上げ。
今の想いを、正直に伝えてみる。

そうでなければ、ここまで走ってきた意味がない。

背中を押してくれた日菜子とあまねにも申し訳ない。

そう思ったのだ。

〈主人公〉

「ごめん。

わたし、もしかすると、今週ずっと勘違いしてたかもしれない。
シーラのためとか思ってた色々提案しちゃってたけど……。

もし、やりたくない事無理にやらせてたなら、本当にごめん」

●正面 30センチ

「優しく、だが少し驚いて。

主人公がこのような事を言い出すとは思っていなかったのでもう」

お嬢様……？」

急に切り出した主人公を、シーラが少し驚いた様子で見つめている。

人気がない広い庭園で、不思議そうに目を見開いている。

それは『何と返すべきだろうか』という、少し困った顔に思える。

やはり、もしかするとすべては主人公の勘違いで、これは見当違いな謝罪なのかもしれない。

だが、たとえそうだととしても、まずはここからだ。

主人公は謝りながら、少しずつ自分の気持ちを述べて行く事にした。

〈主人公〉

「……さっき、あまねと日菜子に言われてやっと気づいたんだよね。

わたし、シーラがOKしてくれたから、シーラは今回の勉強会とかに乗り気なんだろうって、勘違いしてたけど。

別にそうじゃなかったって。

シーラはわたしに勧められたからやってただけで、本当はもっと、他の事をしたかったんじゃないかって」

●正面 30センチ

「優しく、穏やかに否定する。

確かに今週勉強会などに出たのは、主人公の勧めがあったからである。

だが、決して嫌々行っていた訳ではないし、実際良い経験だったと思っているので」
……とんでもない。

無理など、一つもしておりませんよ」

そんな主人公を、シーラは優しく見つめ、きっぱりと否定して、主人公の不安をすぐに払ってくれる。

少し猫背になり、主人公と目の高さを合わせて、手を握って優しく言う。
だから主人公は思う。

そうだ。シーラはこういう人だ。

セックスしてる時とはことん意地悪なくせに、それ以外の事で主人公とすれ違うと、絶対にこうやって、優しく譲ってくれる。

わたしはそれに甘えながら、今日に至ってるんだ。

と。

……でも、果たして、それでよかったのだろうか。

『お嬢様とメイド』としてならまだよくても。

『恋人同士』として、それは正解だったろうか？

● 正面 30センチ

「優しく、穏やかに否定する。

確かに今週勉強会などに出たのは、主人公の勧めがあったからである。

だが、決して嫌々行っていた訳ではないし、実際良い経験だったと思っているので」

お嬢様のご提案は、とても有難いものでした。

私（わたくし）はお話を頂いた上で、自分で判断し。

納得したからこそ、今週このように過ごしたのです。

お嬢様に非などございません。

ただ……」

〈主人公〉

「ただ……？」

ゆえにシーラが『ただ』と続けた時、思わず主人公は繰り返した。
身を乗り出し、ぐっと近づいて、次の言葉を待つ。

シーラがこんな風に自分の気持ちを話してくれる時は、必ず真剣に聞かなくてはならない。

そう思って、繋いだ手を握り返す。

二人の距離が、少し近づく。

●正面 15センチ

「【穏やかに、少し申し訳なさそうに。】

『今回、自分をもっとしつかりしていれば、主人公やあまね、日菜子を心配させる事もなかった』と、シーラは思っているのだ」

もし、何（なに）か問題があったとすれば……それは私（わたくし）の方なのです」

〈主人公〉

「！」

主人公はその言葉に息をのみ、だが、すぐに口を開くのはやめて続きを促す。

正直な所、かけらも予想していない展開だ。

だが、主人公は己が少々視野の狭く、見落としがちな点が多い一面があるのを理解している。

だから……まだ何も言わずに待った。

● 正面 15センチ

「【穏やかに、少し申し訳なさそうに。

今までよりも少し齒切れ悪く、年相応な感じで。

シーラはこの一週間、自分の考えを『勝手な思い込みである』と頭では理解しながら、感情が追い付かず、淋しくなったり、不安になったりしていたので。

それを、自分を想って色々提案してくれた主人公に伝える事自体、申し訳ないので」

その……これは、私（わたくし）の勝手な思い込みであると、勿論理解しているのですが。

その上で、聞いて頂きたいのですが。

実は……少し。

淋しく、感じてしまっていたんです。

『もしかすると。私（わたくし）はもう、お嬢様には必要ないのではないか』と、思っ
てしまつて……」

〈主人公〉

「え!!」

しかし、その『待ち』も、あっさり終わってしまった。

主人公がまたも予想できなかったシーラの言葉に驚愕し、思わず声をあげる。

●正面 15センチ

「【申し訳なさそうに笑つて。

主人公の反応がとても可愛らしく、また『やはり自分の勝手な思い込みであつた』と確
信できたので」

ふふ……申し訳ございません」

それから……微笑むシーラに向かって、今年一番ではないかというくらいの勢いで否定
をした。

〈主人公〉

「な。何それ。なんでそうなるの？

そんな事ある訳ないじゃん！

絶対ない！ 絶対ないから！」

だって、一体全体、何をしたらその仮説に至るのか、主人公には全くわからないからだ。

主人公にとっての主人公は、いつでもシーラにべったり甘え通しで。

『シーラが居なければ何もできないというか、むしろ、普段からして何ならできるのか？』という人間である。

そんな主人公が、一体どこをどうしたら『シーラを必要としない』人間になれるのか。まるでわからないからだ。

● 正面 15センチ

「【申し訳なさそうに笑って。

主人公の反応がとても可愛らしく、また『やはり自分の勝手な思い込みであつた』と確信できたので」

ええ……勿論、解ってはいたのです。

『お嬢様なら、必ず否定して下さる』

『お嬢様は、私の為を想って提案して下さいだけ』

『そこに他意は何もない』
と。

【申し訳なさそうに苦笑して。

『正直に自分の気持ちを伝えるか、質問をすればすぐに解決した問題なのに、できなかつた自分が情けない』という感じで】

……なのにどうしても、不安が拭えなくて。

つい、おかしい事を考えてしまっていたんです。

私（わたくし）も、まだまだですね」

〈主人公〉

「……ううん。おかしくないよ」

だがすぐに主人公は『わからなくもない』『おかしくもない』とも思えてくる。
シーラが感じていた不安は、自分のそれと同じように思えてきたからだ。

● 正面 15センチ

「優しく、だが意外そうに。」

主人公の言葉が予想外のものだったので」

え？」

〈主人公〉

「シーラは、確かにありえない事を考えてたけど……。

そう考えちやうのは……何も。変じゃない。

だって。シーラ、だけじゃないから。

わたしも……同じように思ってたから」

言うのと、主人公は両手を伸ばしてシーラに抱きつく。

シーラはそれを少しだけ驚きつつも、正面から受け止めてくれる。

SE 21 主人公がシーラに抱きつく音

【最初から最後まで流す】

【少し大きめの音量で流す】

二人の距離が、さらに近づく。

●正面 【※15センチほど上※】 0センチ

「優しく、だが意外そうに。

シーラは『主人公も同じように淋しく思ってくれていたなら嬉しい。もしかすると、そうなのではないか』と思っていた。

だが、いざそれが正解だったとわかると、嬉しい反面信じられず、思わず問い返してしまった」

お嬢様、も……？」

〈主人公〉

「……そうなの。

自分から提案しておいて、おかしいよね。

自分で別行動しようって言っといてさ、ほんとはずっとシーラの事が気になって、気になって、会いたくてしょうがなかったの。

でも『言い出しっぺだから』とか思っ、正直に言えなくて。

『もしかしたら、とかまで思い込んで。

一人で、すごい無駄な時間過ごしちゃってたんだ」

ぎゅっとしがみついて打ち明ければ、少し上でシーラがほつと溜息をつくのが聞こえた。
密着した事でシーラの鼓動が伝わって、主人公はホツとする。

シーラもまた、自分と同じように不安を感じ、会いたいと思っていてくれた。
その事実が主人公に自信を与え、温かくしてくれる。

● 正面 【※15センチほど上※】 0センチ

「優しく、愛おしそうに。」

正直な想いを告げてくれた主人公の事が、とても愛おしいので
ふふ……そうだったのですね……」

〈主人公〉

「そうだよ。ごめんね、シーラ。本当にごめん。」

これからはもっと、何でも、ちゃんと話し合ってから決めよう。
わたし、ほんとダメな主人だけどさ。

シーラともっといい関係になりたいから。

シーラの事、もっと大切にしたいから……」

だから、今度は素直な気持ちをすんなり伝えられた。

とことん素直になれない上、暴走ばかりで頼りない主人だが、自覚があるなりに今後良くなっていきたい。

主人公はそんな気持ちで、シーラに思いを打ち明ける。

主人公が一度少し身体を話し、顔を見ながら話すようになった事で、高さがなくなる。距離感が『正面 0センチ』になる。

● 正面 0センチ

「優しく、少し泣きそうになって。

主人公がこんなにも自分を想ってくれていた事がわかり、とても嬉しいので」
ありがとうございます。

【嬉しそうに、しつとりと。

少し時間はかかってしまったが、この件を機に、主人公との絆がまた深まったと思えるので」

お嬢様。そのように想って頂けて。

離れている間も、私（わたくし）の事を考えて頂けて。

とても……とても嬉しいです……」

〈主人公〉

「いつも考えてるよ！

いつも。ほんとにいつも、シーラの事考えてる。
だってわたし……シーラの事、大好きだから」

● 正面 0センチ

「【嬉しそうに、しつとりと。

少し時間はかかってしまったが、この件を機に、主人公との絆がまた深まったと思える
ので】

ありがとうございます。

【一呼吸おいてから。

穏やかに優しく。

改めて自分の気持ちを伝えるため、新しい話題を切り出す】
お嬢様」

〈主人公〉

「ん……？」

矢継ぎ早に思いを打ち明けていると、シーラがふと主人公を呼ぶ。
主人公はそれにすぐ応え、彼女の次の言葉を待つ。
ややあつて……シーラが自分の気持ちを話してくれる。

● 正面 0センチ

「【穏やかに優しく。】

過去を振り返りながら、自分の想いを述べていく」

私（わたくし）は貴方様に拾われ『お嬢様』とお呼びするようになった日から。
ずっと、貴方様のお役に立つ事だけを考えて生きて参りました。

その過程で、貴方様をお慕いし。恋人として過ごせるようになり……。
その日々を何よりも得難く、幸せなものに感じております。

「一呼吸おいてから。」

少し緊張した様子で。

これから改めて、主人公に大切な事を伝えるつもりなので」
お嬢様。

ですから。

【優しく、真剣に。】

改めて主人公に告白する。

ここでは従者としての自分の気持ちを述べている」

貴方様を、誰よりも必要としていて。

貴方様が居ないと不安でたまらなくなるのは、私（わたくし）の方です。

【優しく、真剣に。

ここでは、あえて『貴方』と呼ぶ。

今度は、恋人としての自分の気持ちを述べているので」

貴方が思うよりもずっと、私（わたくし）は貴方を欲していて、愛している。
どうかそれを……いつでも。覚えていて下さいましね……」

それはあまりにも嬉しく、幸福な告白だった。

だから主人公もまた、その想いに応えるべく、今の気持ちを述べる。

〈主人公〉

「わたしだって……そうだよ。

ちよつとよくない事もしちゃうけどさ、

シーラがいないとやっぱ無理だわ。

少なくとも、今のわたしには早いんだってよくわかった。

だから、自信持つてよね。

あなたのお嬢様はさ。あなたがいないと全然ダメなんだから」

● 正面 15センチ

「穏やかに微笑んで。

主人公が真剣に自分の気持ちを受け止めてくれるので。

また、主人公自身の気持ちも話してくれたので。

今度は従者でもあり恋人でもある『シーラ』としての気持ちを述べている」
ふふふ……そうですね。

私（わたくし）ももっと、自信を持たなくては。

私（わたくし）は、貴方様が選んで下さったメイドなのですから……」

〈主人公〉

「そうだぜ！」

こうして両手を上げて答えれば、シーラが泣きそうな顔で微笑んだ。
そのまま優しく顔に手を添え、主人公を正面から見つめてくる。

●正面 0センチ

「少し泣きそうになりながら、
優しく。」

主人公の顔を見ていたら、もっとその顔を見て、キスをしたくなってきたので」
ああ……お嬢様。

もっとお顔をお見せ下さい。

この数日……ずっと。ゆっくりこうする間（ま）もなくて。
とても淋しかったのです……」

〈主人公〉

「ん……♡」

二人、主人公が背伸びをし、シーラがそれを受け止める形で抱き合って、キスをする。

●正面 0センチ

「【※6回※】キスする。

ちゅぱちゅぱ音を立てる、甘々な、軽めのキス」

ちゅ。ちゅ。ちゅ♡

ちゆるっ……ちゅばっ。

……ちゅ♡
」

〈主人公〉

「シーラあ……♡
」

だから主人公は、甘ったるくシーラを呼んで『もっ』とキスをねだりながら、どんどん思考がシーラに占められていく。

はあ……やば。

ちよっとくっついてキスしてただけなのに、なんか、もう。
もう……。

と、みるみるうちに発情していく。

恥ずかしい話だが、たったこれだけのふれあいで、スイッチが入ってしまったのだ。

●正面 0センチ

「嬉しそうに、くすくすと笑う。

思わず笑ってしまう。

今主人公が考えている事が手に取るようにわかるので」

ふふ。ふふふふ。

ふふふふっ♡」

〈主人公〉

「なによお……♡」

そんな主人公を見て、シーラがくすくす笑っている。

つくづく嫌味なメイドである。

どうせ、いや、きつと、おそろく。

……主人公の希望的観測では、自分も似たような事を考えてるくせに。

まるで『性欲なんて概念は知らない』みたいな、ずいぶんと涼しい顔をしている。

● 正面 0センチ

「嬉しそうに、くすくすと笑う。

思わず笑ってしまう。

今主人公が考えている事が手に取るようにわかるので。

また、自分も同じような事を考えているので
いえ……。今、おそらく。

私（わたくし）とお嬢様は、同じ事を考えているのではないかと思ひまして……♡

【※1回※ キスする。

甘々な、軽く触れるだけのキス】

ちゅ♡
」

〈主人公〉

「それってさあ……。つまり……。♡
」

首に腕を絡ませながら聞けば、シーラはもう満足げだ。

主人公はまだ何も言っていないというのに、すっかり心を読んだ気でいるらしい。
だが、今の主人公はそれでも構わない。

つまるところ、主人公はいつでもシーラに意地悪されて、振り回されていた。
それこそが己の一番の幸せだと、今回の件でようやく理解したのだ。

● 正面 0センチ

「【嬉しそうに、くすくすと笑う】

ええ。ご想像の通りです」

シーラ、主人公の左耳に話しかける。

これによって声の方向が『正面』から『左』になる。

● 左 0センチ

「優しく、だが少しセクシーに。

ここからの展開を期待させる感じで」

今すぐ……貴方と触れ合いたい」

〈主人公〉

「……♡」

● 左 0センチ

「優しく、だが少しセクシーに。

ここからの展開を期待させる感じで」

幸い……今日はとても暖かい。

久しぶりに。ここで……致しましょう♡」

ここでフェードアウトして終了。